

第29回常民文化研究講座

創立100周年記念事業 日本常民文化研究所の100年

写真アーカイブがつなぐコミュニティ

2025年12月6日（土）13:00～17:15

神奈川大学横浜キャンパス 3号館 3階 305講堂

【プログラム】

開演 13:00 司会進行 泉水 英計（日本常民文化研究所）

13:00～13:05 挨拶 関口 博巨（日本常民文化研究所所長）

13:05～13:15 趣旨説明 高城 玲（日本常民文化研究所）

13:15～14:00 基調講演 吉田 憲司（国立民族学博物館名誉教授）

写真アーカイブズの共有を通じたコミュニティとの協働

ーフォーラム型情報プロジェクトの経験から

14:00～14:30 報告1 貴志 俊彦（ノートルダム清心女子大学、京都大学名誉教授）

歴史の記録者としてー写真アーカイブと歩んだ15年

14:30～14:40 〈休憩〉10分

14:40～15:10 報告2 吉田 律人（横浜都市発展記念館）

金港一流の写真師ー前川謙三とその時代

15:10～15:40 報告3 原田 健一（新潟大学）

地域と映像をめぐる外と内の視線ー地域映像アーカイブが明らかにすること

15:40～16:10 報告4 佐藤 知久（京都市立芸術大学）

創造のための/としてのコミュニティ・アーカイビング

ーせんだいメディアテークと京都市立芸術大学の実践から

16:10～16:25 〈休憩〉15分

16:25～17:10 総合討論 司会 高城 玲（日本常民文化研究所）

コメント 菊地 暁（京都大学）

17:10～17:15 閉会挨拶 高城 玲（アンケート）17:15～18:00

※全体の終了時間が18時頃になる可能性があります。ご了承ください。

写真アーカイブズの共有を通じたコミュニティとの協働 ーフォーラム型情報プロジェクトの経験からー

吉田憲司

私は、本年3月で国立民族学博物館を退職いたしました。37年に及ぶ在職任中、アフリカで人類学的なフィールド・ワークを続ける一方、多くの時間を「知のフォーラム」をめざした博物館づくりに費やしてきたような気がしています。立場の異なる人びとの出会いと発見、そして協働の場としての「フォーラム」という概念は、博物館展示のあり方に始まり、博物館の資料情報の蓄積のあり方、さらには人類学の研究活動のあり方にも適用されるものとなっていきました。その過程で、博物館で構築する写真アーカイブズについても、フォーラム型という言葉に冠したプロジェクトとして、その整備と活用が進められてきました。

今回の講演では、民博における「フォーラム型情報プロジェクト」の成り立ちと現在の姿をお話しし、写真アーカイブズの共有を通じたコミュニティとの協働について、その可能性と課題について考えてみたいと思います。

1 フォーラムとしてのミュージアム

2 フォーラム型情報プロジェクト

2014－2021 フォーラム型情報ミュージアム

2022－現在 フォーラム型人類文化アーカイブズ

北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有

ソースコミュニティと博物館資料との「再会」

台湾および周辺島嶼の物質文化

焼畑の世界－佐々木高明のまなざし

徳之島・奄美大島の唄と踊り

3 DiPLAS から X-DiPLAS へ

2016－2021 「地域研究画像デジタルライブラリの構築」(略称 DiPLAS)

2022－現在 「学術知デジタルライブラリの構築」(略称 X-DiPLAS)

市川光雄「熱帯アフリカの森と人」コレクション

片倉もところ「アラブ社会」コレクション

参考文献

飯田卓 2021 「画像データベース化支援プロジェクト DiPLAS の概要と関連シンポジウム」『国立民族学博物館研究報告』46 (1): 71-97.

池谷和信(編) 2023 『図説 焼畑の民－五木村と世界をつなぐ』千里文化財団

伊藤敦規 2017 『国立民族学博物館収蔵「ホビ製」木彫人形資料熟覧――ソースコミュニティと博物館資料との「再会」1 国立民族学博物館調査報告 SER) 140.

笹原亮二 2024 「徳之島・奄美大島の芸能と祭りに関する民博人類文化アーカイブズプロジェクトの概要」民博通信 Online No.10

縄田浩志(編) 2019 『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年－「みられる私」より「みる私」』河出書房新社。

西尾哲夫・縄田浩志編 2021 『片倉もところフィールド調査資料の研究』(国立民族学博物館調査報告 153) 国立民族学博物館

吉田憲司 2013 『文化の肖像－ネットワーク型ミュージオロジーの試み』岩波書店

歴史の記録者として——写真アーカイブと歩んだ 15 年 「見られる写真」から「読み解く写真」へ

貴志俊彦（ノートルダム清心女子大学国際文化学部教授／京都大学名誉教授）

はじめに：写真アーカイブと研究のあいだで

本報告は、戦争・占領期写真のアーカイブ構築と活用の「実践」（2010～2024）を通じて、〈記録〉の倫理と公共性を問い直す試みであり、地域の記憶を補完しつつ、研究・教育・社会あるいはメディアどうしの新たな接点を切り開く試みである。

1. 発掘と公開——戦争・占領をめぐるまなざし

- 東洋文庫 - 現代中国研究資料室との合同作業（資料 1）／華北交通アーカイブ：よみがえる膨大な白黒写真 - 国策鉄道会社が遺した戦時期広報用写真の研究データベース（資料 2）
- * 写真というメディアは、誰が何を撮り、誰に見せるかという構造に支配されている。それゆえ、アーカイブ化の過程では、「統治（撮影）する側／される側」の非対称性が新たに政治化されることもある。

2. 記録と構築——報道か、プロパガンダか

- 朝日新聞富士倉庫資料・朝日新聞フォトアーカイブ／毎日戦中写真・毎日フォトバンク（資料 3）
- * アーカイブは、看過された事実を明らかにするだけでなく、「この写真をどう見るか」を相対化させる場をつくること。

3. 共有と連携——コミュニティをつなぐアーカイブ

- 絵葉書からみるアジア | 京都大学貴重資料デジタルアーカイブ／香港浸会大学図書館 Derwent Collection（資料 4）
- 米国国立公文書館（NARA II）、沖縄県公文書館所蔵映像／オーストラリア戦争記念館（AWM） Collection & Records（資料 5）
- The Hoover Institution Library & Archives（資料 6）
- * アーカイブとは、「何を残すか」だけでなく、「何を残せなかったか」を考えること。

おわりに：歴史の記録者として

- 見えてきた三つの課題：デジタルとアナログの共存／アーカイブ化の倫理／コミュニティとの対話
- 写真アーカイブは、過去と現在、研究者と地域社会を結び直す装置
- 今後の展望：分野横断的な協働体制の構築は依然課題、しかし過渡期との認識は必要

金港一流の写真師—前川謙三とその時代—

横浜都市発展記念館 吉田律人

技術の革新は人々の生活を向上させ、新たな文化を創造する一方、既存の文化に対しては変化を迫り、場合によってはその衰退を招くことになる。例えば、カメラ付携帯の普及、機能の向上は、「撮る」という行為を日常的なものにし、誰もが簡単に「カメラマン」となる可能性をもたらした。だが、それは街にあった営業写真館、専門的な技術を有した写真家たちの職を奪う要因の一つにもなっている。カメラが貴重だった時代、全国にあった営業写真館は地域の人々の姿、街の風景、行事などを撮影し、「写真」という記録に残していった。2024(令和 6)年 8 月末、115 年の歴史に幕を閉じた横浜市神奈川区の前川写真館もそうした写真館の一つであった。

前川写真館の創業者である前川謙三は、横浜市の要請を受け、弟子たちとともに、関東大震災後の被災地を撮影したことで知られている。それだけでなく、人物の肖像写真を中心に、4000 枚以上のガラス乾板を残しているほか、「大横浜」の記録者として、震災から復興する横浜の様子を記録し続けた。1918(大正 7)年刊行の日比野重郎編『横浜社会辞彙』(横浜通信社)に「君は金港〔＝横浜〕一流の写真師」と評されるように、前川は横浜を代表する写真家であった。かつて横浜市史資料室に勤務していた時代、報告者は前川謙三関係の資料整理を担当し、その成果を展示会等で発表してきた。写真のアーカイブズを構築していく時、撮影者の経歴や時代的な背景は資料群の性格を考える上でも、押さえるべき基礎的な情報となってくる。本報告では、これまでの成果を踏まえつつ、前川の軌跡を追いながら、「撮る側」の情報整理の方法について事例を提示していきたい。

1873(明治 6)年 11 月 13 日、福井県大野郡矢戸口村(旧鯖江藩領)で誕生した前川謙三は、1888 年 7 月、同じく福井県出身の写真家である丸木利陽の弟子となり、写真技術の基礎を学んでいった。丸木は小川一真とともに、明治期の写真界をリードする存在であった。徒弟制終了後の 1893 年 7 月、前川はそのまま丸木写真館の技師として残り、さらに丸木の指示で渡米して最新式の彩光法などを日本に持ち帰った。その後、丸木写真館の館主代理を経て、小西屋六兵衛店・六桜社(現コニカミノルタ)の技師となり、日本全国をまわって写真技術の普及と向上に努めていった。また、1908 年 3 月、時事新報社主催の「全国美人写真審査」でも審査員の一人を担っている。そうした活動を経て、前川は写真界で名の知れた存在になっていった。

1909 年 10 月 18 日、前川謙三は横浜市山下町に前川写真館を開業、その 3 日後に発生した火災で設備を失ったものの、6 代目杉浦六右衛門(小西六創業者)の支援を受け、1910 年 4 月、弁天通 3 丁目に前川写真館を再建する。1915 年 2 月 20 日、東京美術学校が臨時写真科(後の写真科)を設置すると、前川は寄付金を送るとともに、修整術の講師に就任している。さらに小西六が 1923 年 4 月に小西写真専門学校(現東京工芸大学)を創設すると、再び修整術の講師となった。前川は自らの写真館で後身を育成するだけでなく、教育機関においても教育者として技術を伝承していった。また、横浜市内の同業者や丸木一門の写真家たちをつなげる役割も担っており、昭和戦前期の横浜の写真界を先導する立場になっていく。そうしたなかで、写真を通じて街の記憶を残していった。

敗戦後の 1946 年 3 月 1 日、前川謙三は伊東温泉で 73 年の生涯を閉じる。前川の軌跡を俯瞰すると、その性格は記録者にとどまらず、①丸木利陽を中心とする福井県出身写真家の一角、②写真技術の伝道師、③教育者、④横浜写真界の重鎮などに大別することができる。この前川の事例のように、アーカイブズを構築する上で、「撮る側」の背景(出自・経歴・地域・時代)を知ることは極めて重要である。加えて、地域コミュニティの記録者であった営業写真館についても、その調査と記録化が喫緊の課題であると考えられる。

「地域と映像をめぐる外と内の視線—地域映像アーカイブが明らかにすること」要旨

原田 健一

1 新潟大学地域映像アーカイブの概要

新潟大学の地域映像アーカイブは、2008 年より新潟を中心とした町や村の機関や組織、個人と連携、協力し、地域の生活のなかにある映像を新たに発見してきた。発掘された映像は整理され、デジタル化して保存し、その内容を分析し、映像メディアの社会的あり方を考え直すものとして、新たな社会の文化遺産として甦らせるべく進めてきた。集積された日常生活に散在する映像群は、「にいがた 地域映像アーカイブ データベース」約 20 万点（写真約 19 万 6000 点、動画約 750 本、絵葉書約 3800 点、音源約 700 点）として、連携した機関での限定的な公開をしている。なお、現在、ジャパンサーチでも多くを一般公開している。

<https://arc.human.niigata-u.ac.jp/malui/#!page1>

2 研究方法としての制作

今回は、デジタル映像アーカイブの映像を使って研究するための方法論として、動画『人びとの姿からみる「佐渡」』を制作した。ここでは、研究者がデータベースを使って脳内でやっていた、一つのテーマ、モチーフにそって、異なったコレクションの映像と映像をつなげることを実体化する試みである。ここでは、そのために、① 写真をトリミングする。② 映画のパート（シーン）を抜き出し、違ったコンテクストに入れる。といったことを行っている。当然のことながら、こうした作業の妥当性が研究が問われることになる。

3 制作した映像から見ようとするもの

鉱山を中心に発展してきた佐渡において、戦中の乱掘による鉱脈の枯渇化によって、戦後は閉山することになる。そうした状況のなかで、1960 年代から 1970 年代にかけて観光化が著しく進むことになるが、その後は、佐渡の人びとの間では、非公然に、あるいは公然と佐渡には「金は落ちるが、人は出ていく」ということが、語られるようになる。ここにはどういった社会、文化的な問題が胚胎することになるのか。

制作では、戦後の佐渡をめぐる、James F. English、菅原収佑、中俣正義の 3 人の異なった立場、考えをもつ映像を組み合わせることで、佐渡における町や村、コミュニティにおける日常生活に焦点をあて、そこから生まれたその文化、民俗的なものが、どういった視線で捉えられていたのか、3 人の視線の違いから浮き上がらせる。そして、コミュニティそのものが、そうした輻輳化した視線の交錯する映像の場所であることを明らかにする。

創造のための／としてのコミュニティ・アーカイビング ——せんだいメディアテークと京都市立芸術大学の実践から

佐藤知久（京都市立芸術大学 芸術資源研究センター | 文化人類学）

21世紀のデジタル技術は、恩恵と弊害の両方をもたらしている。誰もが記録・発信できることが新たなつながりを生む一方で、他者や記録の確実性への信頼は揺らいでいる。本発表では、こうした社会的・技術的状況におけるアーカイブの役割や意義について、私が関わったふたつの事例から考えてみたい。

最初の事例は、仙台市の公共施設**せんだいメディアテーク**（smt）である。smtは市民の文化活動をうながし、活動を支援する生涯学習・文化芸術施設で、開設当初から市民との協働事業を通じてコンテンツ（紙媒体だけでなく、**写真や映像メディア**をふくむ）をつくり、それをアーカイブし再利用する「循環」を構想してきた。

2011年の震災を機に生まれたsmtの「**3がつ11にちをわすれないためにセンター（わすれン！）**」は、こうした循環の好例である。震災と復興のプロセスを、個々人の多様な視点を大切にしながら発信／記録／継承していくこのプロジェクト（わすれン！スタッフが「**草アーカイブ活動**」とも呼ぶ）において、市民・アーティスト・専門家らは、みな「わすれン！参加者」という同じ立場で、カメラをもって記録にのぞんだ。smtを媒介に、記録の方法や継承のありかたについての対話も重ねられた。**写真／映像／テキスト／音声**など、さまざまなメディアで記録がつけられ、さまざまな手法で共有された。

強調したいのは、こうした記録活動が、**成果としての記録**（写真や映像のアーカイブ）だけでなく、それまでになかった**多くの関係性を創出**した点である。「誰もが記録者である」というわすれン！のスタンスは、被災当事者と非当事者、そして記録者同士（アーティスト、アマチュアカメラマン、民話採訪者、映画や歴史の愛好者など）がつながるきっかけを生んだ。**記録の公開と共有方法の工夫**によって、記録する人と記録を見る人のあいだにも、出会いやつながり、そして協働作業が生まれた。ここで重要に思えるのは「つねに市民と協働するという基本姿勢」であり、それをまもることによってsmt／わすれン！は、成果物としてのアーカイブだけでなく、**記録活動を通じたコミュニティ形成**にも寄与したとすることができる。

専門家以外にも間口を開き、自分たちの記録を自分たちでつくるという、**コミュニティ・アーカイブ**的な特性は、第二の事例である**京都市立芸術大学芸術資源研究センター**（芸資研：2014創設）にも通底する。

一般に芸術のアーカイブは、美術史を構成する重要な作品・作家を軸に構成されるが、芸資研では、価値が決定された美術史的資料の学術的蓄積というよりも、むしろ**現在と未来の作り手のための**——作り手がそこで育つ豊かな土壌のような——芸術のアーカイブが必要だと考えて、それを「**創造のためのアーカイブ**」と呼んでいる。

創造のためのアーカイブとは、さまざまな芸術的試みやアイデアのあいだに**権威的な価値判断**を行うことなく、できるだけ多くの芸術に関する記録（そしてその記録がもつ潜在的な可能性）に触れうるような場である。そこには傑作だけでなく、あらゆる作品、モノとして残らないさまざまな活動の記録、作品だけでなく制作プロセスの痕跡、さらには非芸術的とみなされているモノやコトなどもふくまれるだろう。

たとえば、1971年からつづく美術学部の授業「**総合基礎実技**」（1回生必修）では、小グループに分けられた学生たちが、教員たちから提示された4つほどのやや突飛な「課題」に対して作品を制作してきた。複数教員が頭をひねって課題を考え、若い学生たちが迷いながら作品をつくるため、課題も作品も必然的に実験的なもの——美術史的観点からみれば価値の低いものと思われやすい。しかし芸術大学の教員や、これから自由にものをつくっていくという人たちにとっては、その記録は、芸術教育・表現・造形のさまざまな可能性についての、豊かな創造のヒントを与えてくれるものとなる。芸術大学というコミュニティから見れば、この総合基礎実技という授業のアーカイブは、豊かな**芸術資源**のかたまりとして立ち現れてくるのである。

これらふたつの事例に共通するのは、**アーカイブ活動における創造的な余白**とでもいうべきものだ。撮影や聞き取りなどの記録活動は、それ自体が何かを作る創造的な余白をふくむプロセスである。また残された写真や映像などの記録も、それをどのように読み解くかという点で、**創造的な読解の可能性**をふくんでいる。

社会的記憶をつくる重要なプロセスとしてのアーカイビングのなかにある、こうした創造的な部分を、専門家だけが専有するのではなく、より協働的に「ひらく」ことによって、アーカイブに関わろうとする人たちのネットワークはより広がっていくだろう。そしてその結果として、アーカイブ機関の役割も、より公共的なものへと変化していくのではないだろうか。そのことを、これらの事例は示唆しているように思われる。